

折寄書指極先生之長

遊世何と申すも西國探病恨の

玉と書く昨冬久しく小浣は此

に於て近來けは健康も弱んと書

に服し去月廿五日には市又向來

其令に如常イタリ軒之浣然

と是に於て、二十六日には物之

に於て初より指導の為の隔先

に於て元來、二十八日は浦佐

川を渡り、仲之、船に乘

りし約半の程に於て、申す

如く就後、時迄久しく呆然

中の事なり、全くと實、喉

の、道に極まり、申す、申す

出、折所近の火界向り、盛

候、是より多敷命、其之、東

に、海に世に妙士、言、極

候、此、其、其、其、其、其

誠、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其



ふれ落竹のこから何と云ふ話不尤之
事と云ふは之の中を我々の心奪ふ
方能也東山の住人日世に於て其
けり其の心は道者の標度か見え
固志を何令く追悼居る傳
大に故人の功績を稱揚せしむると同
時、傳記が御著して之れが不朽に
傳へるべきなりと云ふも今我々の考
へたるは併し之れに日本書紀に當り
乃甲に於て諸方御の心若くは不窺

いり上り果依的の計を以て稱
かむ本心は然りつて今も何れ
其の事あるに於て守り傳へる
學、道、熱の三者が多かるに於し
本心果る界の中心とて仰ぐれ
今一氏の名を述べて全く吾等の
王打野りて史蹟を指し測る所
の如し今此の事を書き進め
くやうに我々の心に迷ひたりを標又
自身に取らるる指導者か其の心
を我々の心に込めしむ

五りちり
茲に

市原先生
函文